



### 大友時代を 生きた人々

鹿毛 敏夫

#### 田原親賢(紹忍)

田原氏は、志賀氏や二万田氏らと並ぶ豊後大友氏の有力庶子家の一つです。大友氏初代能直の子泰広を始祖として、豊後国北部の国東地方に勢力を持ち、大友宗家歴代当主を支え、時には宗家と対立して乱を起こすなど、400年の大友時代の中で極めて大きな力を持つ一族でした。

田原紹忍(親賢)書状(蠣瀬文書)

筑前方面での合戦に出陣して戦功を挙げます。一時は大友氏をしのぐ力を有しているとされた親賢でしたが、その強大化を恐れた義鎮が田原本家を抑圧。親賢は天正7(1579)年に病死しました。跡を継いだ養子の田原親賢も、翌年、大友氏の後継介入を嫌って謀反を起こし鞍懸城(豊後高田市)にこもりますが、大友軍の攻撃によって陥落。田原氏の嫡流は断絶し、その跡は、大友義鎮の子親賢が継承しました。

大友氏によって勢力を削減された田原本家の方で優遇

### 筑後・肥前・豊前の「方分」を兼任

されたのが、分家の武蔵田原氏でした。豊後国安岐郷にある奈多八幡宮(杵築市)の大宮司で大友氏の寺社奉行を務めた奈多鑑基の子で、武蔵田原氏の養子となった田原親賢(入道名紹忍)は、特に大友義鎮・義統父子の信頼を得て、政権内で権力を振るいました。

戦国期の大友氏は、「加判衆」と呼ぶ権力の中核にある重臣が、豊後以外の国単位で行政・司法・警察・軍事指揮の各権限を担当する「方分」という統治体制を敷いていました。中でも田原親賢は、筑後・肥前・豊前の3方国の方分を兼任していたと考えられます。

は、彼の者の所へ罷り著き肝要の段、申し付けらるべく候一

豊後府内の上市町の岩田与三兵衛入道が大友氏公認の計屋商人であるので、豊前国上毛郡・下毛郡からの商人が府内で商取引を行う際には、まず岩田氏の元に荷降ろしをせよ、との大意です。

16世紀後半の日本では、商取引の決済が銀で行われていました。しかしながら、この時代に銀を計量するはかりや分銅は、地域によって規格が異なります。そこで、北部九州一帯に領国が拡大した大友氏は、他国の商人が豊後府内に来て銀取引をする際の計量商人を指定して、衡量制の統一を図ります。その経済政策の一環として、豊前の方分だった田原親賢は、担当する豊前の商人にこのお触れを出したのです。

(名古屋学院大学国際文化学部教授)